

## 【青年期臨床;心の躓き、さらなる心的苦闘のあらまし】(1976)

マーサ・ハリス(Martha Harris)

〔原題;Infantile elements and adult strivings in adolescent sexuality〕

(直訳;青年期の性愛にうかがわれる幼時的要因、並びに‘大人’たらんと苦闘すること)

まずここで最初に申し上げなくてはならないことは、この論文に取り掛かってすぐさま、ここに掲げた演題があまりにも漠然としており、従って論点を幾つかに絞ってゆかねばなるまいということを感じさせられたということです。さらに、これから語ってまいります症例に限らず、他にも青年期の子どもたちの分析資料が多々ございましたから、改めてそうしたかなり広範囲に亘る個々の症例に立ち返り、何度も詳しく目を通すことを余儀なくされたわけなのですが、概観しますとそうした彼らは、かなり才能に溢れており、その外的環境も世間並み以上とも言えそうな、随分と恵まれたものであります。すなわち、外から眺めれば何もかもが申し分ないほど恵まれているのに、それにも関わらず、その持ち前の好運を十分に甘受することがまるで出来ずにいるといった特徴が浮かんでまいりました。

実のところ、それらの総ての誰にも自分には何ら‘価値がない unworthiness’といった感覚がありまして、またそれと並行して、それとはまったく真逆なく自分は特別なんだ！>といった確信めいた気分を有していたと言えます。どうやら彼らの両親、片方或いは両方ともが、彼らを特別だといったふうに見做しているのは確かにありそうなことなのでした。それで、分析治療を受ければどうにかなると、最後の‘頼みの綱’として期待するわけなのですが、それもいざ始めたとなると、どうやら<自分はこんなはずじゃない！>といった彼らの不満感はい依然としてどうにも宥めようのない結果となるといった次第なのでした。つまりのところ、おそらくこうした若者たちは、彼らの外見、知性、情緒的資質、そして社会的立場といったものが生来的な優越性の証拠としてあるわけではなく、むしろ彼らの人生をとおして、それらを維持し続けていって、また自らがそれらを自らの責任として引き受けてゆく中でしか決して何程も実を結ぶことはない、つまりは恩恵(gifts)なのだということをしっかりわきまえてゆくことを学ばなくてはならない、かなり厄介至極な心的状況にあったと考えることもできましょう。こうした意味合いでの‘学び’の躓きは、実際のところ、それ自身彼らの性愛的態度及びその行為の中で露わになることが往々にしてあるように見受けられたのであります。

その潜伏期(latency)においては、「防衛組織」が有効に機能し、それで彼らはさほど問題を起こさずともどうにかその時期を潜り抜けてきたわけでありまして。それが青年期に到りますと、苛烈な性愛的衝動、そしてそのフラストレーションには殊の外脆弱で傷つきやすいということになるわけですね。どうやら彼らは、青年期グループ内において‘皆の中の一人’に加わるといったことがなかなか困難なようでありまして。そしてグループ内で仲間同士の経験を分かち合いながら、そこからさらに大人の関係性へ向かって歩を進めてゆくといったことが難しい傾向にありそうです。彼らはむしろ一足飛びに大人の世界へ

と引き上げられようとして焦れるわけなのです。そして、よく聞かれる童話の最後の締め括りのフレーズにもありますように、〈・・・それから(二人は)幸せに暮らしましたとさ〉といった結婚願望に飽くまでもしがみ付こうとするわけなのであります。

## ■理論的背景

ここで、青年期の性愛について、他の多くの出版物に見られる包括的サマリーのようなものを提示することは可能でもありませんし、またとても有益とも思われません。でありますから、ここではこれから述べますところの症例、特に或る二名の男女について私が熟考を重ねてゆく上でとても役に立ったと思われるものに限って、それらを参考にしてまいりたいと思うわけです。

まずはフロイトについて語りましょう。私の理解したところでは、性愛(sexuality)というものを全般的に快楽原則によって占められていると彼は考えております。自我(ego)が、その充足をとおして、生命体のホメオスタシス(恒常性)を保ち、苦痛を回避せんとすることを目指しているといったことであります(1911)。彼は、成人と子どもを区別するのは、基本的に性感帯に随っております。すなわち、それら口唇愛的段階から、肛門愛的そして性器的へ辿り、それから生殖器的優位へと進むわけです。それら前生殖器的要素は性的前戯に限定づけられることとなります(1905)。こうした論説は、後にアブラハムによってよりいっそう敷衍化されました。そうした中には、両価的(ambivalence)でかつ‘部分的対象’との関係性を経て、さらには両価的ではない全対象愛への進展が内包されてゆくことになるわけであります。

さらには、メラニー・クラインが、子どもとのセラピイの経験をとおして、快楽原則及び現実原則といった経済的(economic)概念を敷衍化し、そこに自己愛から対象関係への進展において、「価値」に何らかの変容・変移が起こり得ることを論述しました。(つまりは、妄想分裂ポジションから抑うつポジションへということになりますが。) ここからさらには、子どもが愛する対象の安寧を考慮するときに初めて、対象を無傷のまま生き永らわせんがために(spare)自ら取り組むことになるといった概念が形成されるわけであります。つまりのところ、ここでその貪欲さおよび私利私欲といった、己れの両価性(ambivalence)にどうか折り合いを付けてゆくといったことが幾らかなりとも可能になってゆくわけであります(1939)。彼女は、発達というものが「認識愛的衝動(epistemophilic instinct)」によって大きく左右されるといったふうに考えておりました。そして幼い子どもが投影と摂り入れといったプロセスをとおして、まずは母親のからだ(body)、そしてさらにはパーソナリティーであります。そうした対象との相互作用をとおして成長してゆくさまを見据えていったわけであります。彼女は、「楽しむ能力(the capacity for pleasure)」の基盤となるものとは、子どもの誕生後その始まりにおいて、世界とどのような関わり合いを持ったかということにあり、すなわち満足的な性愛というものの源泉は、つまりペニスとヴァギナとの間における快楽の能力とは、オッパイ(乳房)との楽しめる関係性、つまり乳首と口との間におけるプロトタイプ(原型的)な快楽に根ざしているということを考えていたわけであります。

ここからビオンの「コンテナー及びコンティンド」理論へと導かれるわけです(1962&1979)。そこでは、「母性的夢想(maternal reverie)」というものが、子どもが発達、つまりからだとかからだの接触と同様にところどころの接触を通して進んでゆくといった、その成長には不可欠で重要極まりない役割を担っているということが語られているわけであります。

メラニー・クラインが叙述したところの「分裂過程(splitting process)」(1946)は、フロイトの「構造論(エゴ、イド&超自我)」にいつそう堅固なるものを付与したと見做していいでしょう。そこからさらには、エスター・ビックが「エゴ・ストレンクス(自我強度)」について、すなわちパーソナリティーの機能としての‘皮膚’および‘二次的皮膚’といったことについて詳しく論究し、そこからメルツァーによる「パーソナリティーの大人の並びに幼児的構造」といった論述(1972)へと導かれた、そのような進展が見られるわけであります。

これらの概念は、青年期の子どもが‘家族内での生活’から‘外界での生活’を目指し変容を遂げてゆく中で、自らをどのように位置づけるかを理解する上でかなり重要なものと私は考えております。すなわち、青年期とは、それまで家族に抱えられてきた、その‘コンティンする機能’が消失し、それはいずれ外界において、またやがてパーソナリティーの内部において、取って代わられねばならないといった、実に際どい時期として見做されるかと思われまふ。すなわち、これら若者たちは‘不統合’の状態を経て自立した成人として‘新しい統合’へ向けての歩みを踏み出してゆかねばならないわけでありまふ。こうした転換において、青年たちのグループは、‘二次的皮膚的な抱える機能’といった役割を担うことにもなりまふ。この時期は、つまりのところ、かつての古い小児的葛藤がぶり返され、それが新たな強烈な性的衝動の観点から、再度取り組まれねばならないといったことになるわけでありまふ、そこではそれ以前の対象関係性及び同一化の内在化されたものの‘質(quality)’が大いに試されることになるっていいでしょう。

こうした概念は、性愛の発達とは性格形成および同一化過程と緊密に結び付いており、さらには成人の性格は、そのパーソナリティーの幼児性的構造とは別物だということが意味されております。言うなれば、その後者なるものは、何らかのストレス下では妄想分裂ポジションへと退行し、私利私欲(self-interest)やら遮二無二苦痛を避けんとする衝動に得てして圧倒されがちであります。そうした構造の性愛とは、嫉妬、羨望、貪欲さ、そして快樂へ向けての競争意識に大いに駆り立てられることになるわけです。つまりは、子どもは両親が享受していると彼が思うところの快樂、それは自分には否定されていると信じているといったことで、そうしたことがいつそう煽られることになりがちなのです。またそこでは、自らの限られた能力を認めることが欠如していることに基づくところの愚痴やら不満といった感覚を伴う傾きがあるともいえまふ。

こうした幼児性的な要因は、青年期において殊の外著しいということは明らかであります。勿論のこと、成人に到ってもそれは持続されるわけで、つまりは多かれ少なかれ程度の差はあれ、われわれ総てに於いて作用し得るものともいえましょう。それらは実に、メラニー・クラインが「妄想分裂ポジション」と名付けたものの特徴なのであります。すなわち、その心の状態なるものは、良き対象への愛と感謝の念よりも、自己保存(自衛本能)、自己中心性、そしてナルシズムがはるかに優先されているわけであります。それぞれパーソナリティーにおいて‘大人たらんとして苦闘すること strivings’は、それぞれ程度の差はあれ、すでに幼少時から始まっているといえましょう。その場合には、どんなに束の間であろうとも、抑うつポジションに差し掛かったといったことなのであります。すなわちそれは、子どもが、気遣い・思い遣りの心といった親なる人の能力を摂り込み、それに同一化することが出来るといった心的状態なのでありまして、それも彼が受けてきたケアへの感謝の念にその基盤があるといえましょう。このことは、彼自らの情緒のあり様及び己れの対象への態度において幾らかなりとも心的責任能力 (psychic responsibility) が備わってきているとも言えましょうし、さらにここには彼らに対しての要求がましさを制限しようとする努力もまた想定されるかと考えられます。

メルツァーは、その著書「Sexual States of Mind」(1972)において、メラニー・クラインの抑うつポジション理論の意味するところのものをより詳細に概説しております。つまりのところ、それこそが成人の性愛そして幼児的な性愛の違いを理解する決め手になるということなのです。彼は、成人の性愛的態度の発達なるものが、どのようにその性格的発達 (character development) と繋がっているかということの詳細を述べています。幼児的な性愛とは、基本的には快楽を得ること、そして万能感的に充足されることに関連づけられます。それも身体的操作もしくは空想においてであります。それらの特徴とは、子どもがその空想化された親たちの秘密の関係性(原光景)に彼自らを投影すること、それもさまざまな意味で、そしてさまざまな程度の‘悪意’を投げ込むといったことでもあります。さらには大人になるのを待たねばならないといった事実を頑として認めようとしないこと、つまりその大人になるということは、その与えられた権限やら恩恵を謳歌するといったことと並んで、責任を引き受けるということであり、とりわけて‘赤ちゃんの部分’をその内に抱え持つ責任なのでありますけれども、それが否認されているわけであります。

彼は、大概の幼児的な性愛において多かれ少なかれ顕在するところの「倒錯 perversity」的的要因について詳細に描写しております。それは、根底的には自己の内なる部分における、‘親なるカップル (the parental couple)’の創造的同盟 (the creative union) に対抗して仕組まれた、「自己愛的組織 narcissistic organization」から派生するものといえましょう。こうした組織について、まずその発端として考えられますのは、赤子の口にミルク(お乳)をもたらすときの「乳首と乳房とのコンビネーション」なのでありまして、それが後の段階になって、赤子をして親の性行為に対抗せんとする際には、「ペニスとヴァギナの結合 (the union)」になるといった次第なのです。そこで、彼の論述に従うとしますと、こうした倒錯の中核にあるのは「肛門期的否定主義 (anal negativism)」ということになりましょう。

青年期の子どもの分析治療の中心的課題になりますのは、これら幼児性的かつ倒錯的要素の纏れを解くことにあるかと思われます。それは、より大人の責任を有する関係性へ向けて奮起してゆく子どもの潜在力を妨げるといったことになりますわけで、さらには彼らの成長が何らかの袋小路へと追いつめられる、もしくはそうしたものと逸らされてゆく傾向にあるからであります。概してこうしたことが、既に触れましたように、前途有望であるはずがさっぱり期待外れで何事も成就できず、もしくは如何なる成功をも甘受できずにいる、凡そ潜在的な能力においては十分に恵まれている青年期の子どもたちの症例では実に中核的課題なのであります。

さて、今ここで私は、こうしたカテゴリーとして見做される二人の若者について、その分析治療から、臨床マテリアルの幾らかを提示することに致しましょう。

## ■症例その1;ロザムンド

ロザムンドは、年齢が18歳6ヶ月です。実家はかなり遠方にありまして、彼女が学校を卒業してから大學での籍を得るまでの期間、私の許で分析を受けることが取り決められ、毎通通うのは大変と予想されたので単身ロンドンにしばらく滞在したというわけです。彼女は最後の夏季休暇で、グループの仲間と一緒に海外旅行をしまして、そこで彼女よりも何歳か年上の若いミュージシャンと出会い、恋に落ちたわけであります。その恋にすっかり嵌り、彼に夢中になった時点で、彼が別の誰かと婚約しており、この婚約を破棄する気持ちなど彼には全然ないことを知ったのであります。その事実にも関わらず、結局二人は、夏の終わりまで、いくらか牧歌的ともいえそうな、かりそめのロマンチックな恋を続けたことになります。

ところが、学校に戻った時点で、彼女は以前の親しかったクラスメートとも疎遠になり、学業にも全然熱が入らなくなり、そして徐々に食欲を失ってしまったわけです。彼女は、しばらくさほど気づかれないう程度に少しずつ痩せていったわけですが、やがて彼女が休暇で帰宅した折に、それはもう隠しようのない深刻な事態として、家族の誰の眼にも明らかとなったということになります。そこで分析家のコンサルテーションをしばらくの間受け、そのお陰で彼女は学業にもどうにか復帰したわけですし、大学の入試にもどうにか合格し、そして食べることに幾らか、からだどころがどうにか維持できる程度には回復していったことになります。が、摂食症そのものは依然として懸念されましたわけで、それで大學に入るまでのしばらくの期間を利用して、この時期に分析治療が取り決められたという次第です。

最初に私が彼女に会いましたとき、その美しさそしてエレガントな雰囲気にとっても強い印象を受けました。ごく普通のジーンズとか綿のTシャツといったカジュアルな装いながらも、いかにも上質な若き淑女の外観に見えたわけであります。極端に痩せてはいましたものの、彼女はそれほどやせ衰えた風でありませんでしたし、顔の表情はいくらか微妙に抑うつ的にも見えたものの、それも時としては急激に変化し、時折こちらに反応する折など顔をパツと輝かせることもありまました。彼女は、分析を長期間は受け

られないという事情を意識してか、それに駆り立てられるように、分析に意欲的かつ素早く順応し、コミットしてゆきました。この時点では、まず取り敢えず摂食障害が彼女の関心事でありました。それと彼女の‘素晴らしい夏季休暇’に関連性があるなど思いも寄らず、さらに彼女のパーソナリティーの部分、そこには彼女にとってまだ開かれていないページがありそうだとほめかされても、幾らか当惑を覚えるだけで、本人には何ら自覚されるに到っていませんでした。

分析を開始しました時点では、もはや食欲がないとか友だちも要らないといったことが問題ではありませんでした。むしろ彼女に食べることを禁止するところの何か、そして彼女の社会的なアプローチについて妨げとなるところの何かを克服することなのでした。彼女は、一旦食べ始めると止められなくなるのではないかと危ぶんでおり、それで躍起になってスーパーヴァイズ(監督)の眼を光らせて終始警戒を怠らないようにしなければならなかったのです。彼女は、クリームパンケーキとか駄菓子類には目が無いわけではなく、入浴しながらレシピの本を読み漁ることが何よりの娯楽とされていました。彼女は冷蔵庫の中に何かしら美味しそうなるものを目にする、ついつまみ食いをするのでしたが、しかしそれを誰か他の人たちと一緒に食卓でいただく折には、たとえ勧められても手を出そうとしないといったふうなのです。

彼女は、摂食症になって以来、それとは別に、18ヶ月年下の弟に対して何故かしらふいと嫉妬心が起こるといった、これまでに無かったことが問題として出てきたことに大いに戸惑っておりました。彼女の児童期には全然そんなことは記憶にないことでした。それどころか、母親が彼を世話するのに手を貸すことがとても嬉しかったといったことを思い出さばかりなのでした。

手短かに言えば、これら最初の分析セッションにおいて示唆された事柄は、彼女の恋愛沙汰が引き金となって、彼女の内面で赤ちゃんっぽい貪欲さそして専有欲といったものがぶり返されたということ、そこから勃発した失望感そして傷ついたプライドといったことが、むしろ彼女自身を徹底的にそれらとは無関係なものとして自らを遮断(カット・オフ)してしまったということでしょう。それまでに彼女が受けていた分析的コンサルテーション、さらには私の許に通うようになり、対話療法をもっと受けたいと彼女が意欲的となった時点では、貪欲さという点で今やそれが彼女にとって脅かしとなったと言っていいでしょう。彼女は以前よりもそれを自覚はしていたものの、それを認めまいと懸命であったわけなのです。彼女が知識に対して、それから性的な体験に対しても熱狂的となることに繋げて語られた解釈、すなわちそれは基本的には赤ちゃんが求めるところの食べ物やら知識への源としての‘オッパイ’に対する貪欲さであるといったことは、彼女に即座に了解されました。彼女は、自分がどれほど独占したがるかをここに到って初めて気づいたと語りました。すなわち、彼女が家族全員にケーキを焼いていたときのこと、その時点ではそれらは彼女のケーキなのであります。それを彼らにも食べてもらおうと思うわけですが、それは彼女が<どうぞ召し上がれ>と言うまでは決して勝手に食べてはいけないといったこと。。

これは、彼女の‘内なる家族’に対していかに支配的かということを示唆するものであります。一見して彼女自身の食べることをスーパーヴァイズ(監督)しているように見せかけて、実は彼女は彼女の‘内

なる対象’、彼女の‘内なる家族’をスーパーヴァイズ(監督)しているわけでありませう。ケーキ(すなわち‘オッパイ’)は彼女のものであり、そこで彼女は誰がそれを貰えるか、いつ、そしてどのぐらいといったことを告げるわけでありませう。彼女は、青年期的な世界、つまり競争したり関係性を結ぶことに躍起になることから、‘若き寮母(家政婦)’といった立場へと退却してしまったともいえませう。そうしたエレガントな若きご婦人の家庭内における立場とは、肛門をとおして、オッパイに投影することで獲得したものでありませうです。それは、例えば入浴しながらレシピを読み漁ることに耽溺することやら、また冷蔵庫に入っている食べ物をちよいちよいつまみ食いするといったことによっても示唆されておませう。

このことは、やがて彼女にも明らかなことになってまいるませう。彼女は分析治療開始の3週間ほど経て夢を見始めたのでありませうが、これらの夢について、幾つかここでお話することにいたしましませう。それらを例証しながら、この比較的短い分析期間に於いて、どのような事柄に焦点づけをして分析が遂行されたかを語ってまいるませう。

最初の週の分析セッションの週末に実家に帰宅し、その翌週分析セッションに戻って来て、彼女は夢を2つ語りました。その一番目は次のようでありませう。《裏庭に白い猫が一匹いた。それが彼女に<ハロー！>と挨拶した。それは彼女を全然驚かすことはなかつた。しかし彼女の家族そして友人たちがその辺りにいて、<あらまあ、可愛いロージーちゃんが猫にお話できるように仕込んだのね。なんて賢いのかしら…>と感嘆して語ったとか。彼らは、猫がそんなふうに話すなんて聞いた例がなかつたのです。》その同じ夜に見た、次のような、もう一つ別の夢がこれに続きます。《ロザムンドは飛行機に搭乗し、パイロットになっておませう。どこか高層ビルの頂上をめざして飛行してゆきます。高く高くぐんぐん急上昇してゆきますから、ひどく興奮したわけだ。しかしながら、ふと後尾からまっさかさまに落下しはしないかと、彼女は俄然怖くなったというわけだ。》

<お話しする猫の夢>については、青年期の子どもが頻りに讃美されることに憧れるといったことを思い浮かべることができませうが、しかしこの夢の中でのように、どうも彼女は時として小さな女の子になることがありませうだ。それだけでなく、猫は早期の子ども時代のペットでもあったわけだ。どうやらこの夢は、裏庭(彼女のお尻)へと忍び入り、そしてその賢い‘雑音(オナラ)’でもって‘可愛い仔猫ちゃん・オッパイ’を満たすといったふうな赤ちゃんが語られているように思われませう。この「話す分析 talking analysis」に熱烈にコミットしていることが、深い意味では、分離およびそれに付随しての情緒に抗しての防衛を活性化させ、万能感的肛門投影同一化がオッパイへ向けられ、それからそのオッパイは‘彼女の生徒’やら‘彼女の赤ちゃん’になるといったことのものでありませう。一方で彼女はそれを調教することの出来る‘賢い人’にもなっているわけだ。ここに、ロザムンドの美しさ、またその頭の回転の速さといった知性が、その幼少時にも、それから後年になつても、こうした空想の証明ともなるような讃美を大いに喚起しがちであつたらうことは、誰の目にも容易に見て取れるわけだ。

さて、二つ目の夢では、同一化は‘父親のペニス’に関わりがあるといったふうではありますけれども、(彼は戦時中パイロットであったのです)、しかしどうやらむしろ不確実な(当てにならない)‘糞便的ペニス(faecal penis)’との同一化でありそうに思われます。そこで彼女は尻尾の上にどっかり尻を付け、オムツを汚している赤ちゃんに過ぎないといった自分を見出すことになりそうです。

この夢に引き続いて、彼女の父親そして弟との同一化についての更なるマテリアルがもたらされました。すなわち、「語ること talking」が彼女にとって昔からとても重要な意味を有していたことについてであります。彼女の父親も弟も、一見して誰とでも気さくにお喋りするタイプであり、人を喜ばせるといったことも得意であり、とても外向的な人たちなのでした。ロザムンドは、11歳のときに寄宿学校へ入ったわけですが、そこでホームシックになります。でも何とかこの感情を他の子らには知られないように覆い隠そうとします。やがて彼女自身、極めてお喋り屋さんで、そして人を喜ばせるタイプになってゆくことで、自らにもそれを覆い隠してゆくようになったというわけです。そうした役割は、一貫してとても上首尾であったわけで、それが青年期に到り、幾らか先細りし始めたということだったようです。ここから推して、どうやらその競争相手に自ら身を滑り込ませるといった投影同一化、つまり対象そのものに成り済ますといったこと、それが彼女にとって或る意味情緒的葛藤を回避する方法となっていたと考えられます。すなわち、母親を独り占めすることを諦め、彼女を父親もしくは弟と一緒にいることを許すといった、未解決な幼児的葛藤を避けるためなのですが、それで彼らに自ら成り済ましたということになりましょう。

ここで、この少し後に彼女が見た夢について報告いたしましょう。上記の2つの夢の幾らか矯正されたものといえましょう。些か躁的であり、内心得意満面といった嫌いがなくもないのですが…。ロザムンドは学校に戻って行くところでした。二人の取り分け仲の良いお友だちと一緒にです。そこに後輩の子どもたちがいて、なにやらひそひそ内緒話をしており、彼女らを素敵よねとかひそひそ噂しているようでした。そこに或る男性が登場し、卒業生で極めて優秀な成績を収めた者たちにご褒美が与えられるといった場面になります。彼女の順番になったとき、彼はスピーチをし始めます。そして一冊の奇麗に装丁された詩の本を彼女に手渡します。事実その詩はどうか彼女自身の創作であるようです。ワーズワースみたいな感じの…。彼女はそれからひどく混乱してしまい、<すべて間違いであり、私はこれを創作した者ではありません…>と言おうとします。それから、彼女がその本のページを捲ってみますと、自ら語った言葉が幾つかそこに認められたのであります。そこで、詩は彼女が語ったことと幾らかでも関係性があったということになります。実際のところ彼女の語った事柄からそれは創作されたということになるわけです。それで彼女は褒美を受け入れることに致します。つまり、自分がまったくのところ詐欺師(ペてん師)というわけではないんだから、と自らをどうか説得したということになります。

さて、ここで青年期の子どもたちが学校に戻っていったとき、より年下の子どもたちから讃美されることを渴望するといった具合に、‘お父さん’からのご褒美を貰うこと、彼女自身の創作物、言うなれば彼女の分析的料理法(her analytic cookery)、つまりそのお手並みに対して賞賛を勝ち得ることに躍起になっていることが見て取れるわけです。しかしながら、ここには或る意味幾らか真実があるともい

えましょう。分析的セッションというもののその本質について<ワーズ(言葉)のワース(価値)>といった具合に認識(理解)しているわけでありますから。幾らかハーモニー(調和)やらもしくはリズムを形づくること、すなわち単に彼女自身の創作物というだけではなくて、関係性における幾らか肯定的ともいえる何かがありそうです。それは、<お話のできる猫>を超えた何かであろうかと思われます。しかしながら、この夢の中で隠されているものとして、「オッパイの‘美’および‘詩’」とはその‘糞便’によって満たされることを通して創造されるといった「幼児性万能感的空想」がうかがわれるように思われます。ここに、褒美を貰うことに自分は値しない、実際のところ自分は‘偽者’でしかないのだからといった疑念がなかなか消えない理由があさうです。そして己れの正体が暴露されること、仮面を剥がされること、そして侮蔑されることの恐怖もまた執拗に拭われずにあるといったことになりましよう。

そういうわけで、<お話する猫の夢>では、彼女は‘オッパイ’であるところの‘お尻(bottom)’でしかないということになります。<ワーズワースの夢>では、彼女はそれで満たされたお尻というわけであります。この少し後に見た夢では、彼女は自らを‘オッパイ’を空っぽに吸い尽くす貪欲な赤ちゃんとして幾らか認めたふうな趣きがありました。

その夢とは、彼女がワンルームマンションに移り住んだ後に見た夢になります。彼女は、自前の電気ストーブを部屋に持ち込んだということから話を始めます。ところがその電流が強すぎて、家中のヒューズが切れてしまったということでした。それから彼女は、生きながら焼かれるといった夢を見たわけです。この夢の中でロザムンドは、彼女の名付け親(godmother)そして彼女の幼い二人の娘たちと一緒にありました。生きながら焼かれる順番を待っているわけです。すべてをごく冷静に捉えているものの、彼女の名付け親が子どもたちを連れてきていることを内心非難します。とても幼い者たちには見せられないような惨たらしいイベントを見せるのはいかがなものかと…。それから彼女は焼かれたようであります。そして、幽霊となって再び登場し、名付け親に話し掛けます。<焼かれてしまうのもそんなに悪いことでもなかったわ。結局何も痛みを覚えることはなかったもの…>と。そしてここで口を挟んで彼女が言うことには、<昔から、私の‘万能感’って不滅なんですの…>というわけ。その後ふと彼女が思い出したのは、焼かれるということについて知っていることと言えば、彼女の顔から肉片が剥がれて飛んでゆくといったことなのだとか…。

彼女は、この夢が何かしら或る意味合いで摂食症と関連があることは確かに思えたのですが、でもどんなふうにか返は言えないとのことでした。それから、再びここで改めてわれわれは、からだの‘上の部分’と‘下の部分’との混乱について取り組んでいること、さらには彼女の肉片が彼女の顔から飛び散ってゆくということは、どうやら或る意味‘下痢’について言及されているのかもしれないと考えた次第なのです。彼女は即座に反応し、<赤ちゃんの時にひどい腸炎を患ったということを知っている。だけど、それが離乳の後だったのか、もしくはその9ヵ月後の弟の誕生頃だったのか記憶がないんです>と語ったのです。つまりそういうわけで、どうやらここで幾らか繋がりが見えてきたようでした。

それから電気ストーブがあまりにもパワフルであるという話についてですが、つまりのところ、‘オッパイ’の温もりやらその生命力を赤ちゃんが求める、その熱情とそして貪欲さのあまり、それは離乳時にはもうたくたに消耗し、最終的には完全に壊れてしまうといったことが懼れられているといったふうに見ることもできましょう。後に夢の中で、彼女は腸炎に罹って小さな幽霊と化してしまい、そして再び拒食症になるわけですが、彼女は‘燃え尽きたオッパイ’と同一化されていることとなります。しかしながら、それも全然大丈夫といった感じで慰めを与えてくれる(神 god/良き good)母親が彼女の幼い子どもら(すなわち、部分対象レベルでのオッパイの表象)と一緒にいることになっているようでもあります。

これは、離乳そして弟の誕生が彼女にとっては屈辱であったということを示唆しております。それは、あまりにも貪欲でかつ破壊的な赤ちゃんであることの結果としてであります。この屈辱から逃れるために、彼女は‘オッパイ’の一つにこっそり成り済まし、密かに母親と‘双生児的姉妹’といった関係性を築くわけでもあります。そうすることで彼女は、母親に安心を与え、次に産まれてきた赤ちゃんにとってもう一人の小さなお母さんになるべく共に団結してゆくといったことでありましょう。この夢は、ますます貪欲な幼児的要求がいや増す分析セッションの或る時期の先触れとも言っているものでした。そこでは食べ物を求めるといったこともそうですが、幼い女の子の絶えず注目に飢えているといったことにも現れるわけでもあります。例えば、彼女の夢の中のクリーム・パンなどは、際限もなく好ましいものとしてあるものの、だが実際食べるとなれば要注意で、つまり、もしもトイレに行きたくなくなったときにすぐに行けないとしたらとどうしようと不安になるといった具合でありました。週末に彼女は、長旅も厭わず、出来る限り実家に戻るようにはしておりました。それまでの人生において経験したことのないほど、この点において彼女は几帳面であったわけで、それも結構骨での折れることでした。それから、案じられましたことには、強迫的過食そして強迫的に吐くことが2、3ヶ月の間続いたこととなります。この時期、彼女はまた一貫して夢を見ても覚えていないといった状況にありました。彼女の貴婦人風の沈着さはごく薄らいでゆきました。まるですっかり‘子ども返り’をしているふうで、食べ物をガツガツほおぼるか、または故意に食べ物を吐くやらもしくは下痢になるといったふう拒絶が代わる代わる起きていたわけです。しかしながら、徐々に彼女は夢を記憶したいと願うようになり、同時にまともな分別のある食べ方をしたいと願い始めたわけです。やがて、彼女の中に羨望的な、悪意ある衝動を認め始めてゆきます。つまり、‘オッパイ’に対しての羨望であります。すなわちもしも彼女にとって、それがすべて彼女の専有物であると感じられるのであれば、授乳することの満足を‘オッパイ’に与えることを敢えて嫌がるといったことなのでした。例えば、彼女は或る夢の断片の記憶を語りました。それは学校へ戻った夢でした。そこで彼女はとてご機嫌に時を過ごし始めたのですが、それからそれが教師らに見つかって、嬉しげな顔をするのと思い、これをすぐさま隠すことにしたというわけなのでした。それから2つの夢が続きました。それは、彼女が身体的にも社会的関係性にもそれらいずれに於いても、再び建て直しを始めた時期の始まりを示していたといえましょう。最初の夢は、私のコンサルティング・ルームにあった鉢植えのレンギョウの木についてであります。しかしそれが花開いていたのか、もしくは枯れて死んでしまっていたのか覚えていないといったことでした。これに続く夢は、丸々と太った、ベルドナデット・デブリン〔註；北アイルランドの政治的活動家〕のような怒った顔付きの孤児で、彼女の父親が共同墓地からその子どもを連れ戻します。

彼は、死人である彼女の息を吹き返してやり、それから学校へ通わせるといったふうに、どうにかこの世へと彼女を連れ戻したというわけです。つまり自分だけ独りで9日に1回ほど天国へ逃避行を企てるという、それ迄の困った習慣から彼女を救出したというわけでありませぬ。

このベルドナデット・デブリンとは、絶えずNo(イヤ)を繰り返す言い張る、反抗的な反・政府主義で、反・両親主義、さらには‘爆発的な下痢を垂れ流す’ともいえそうな彼女の或る部分を表徴しているといってもよろしいでしょう。それは、共同墓地を天国と見做し、そこに一人でいることを理想化しているわけです。死と生が混乱してゴツチャになっているようです。おそらくは分析において、それについて正しく学び直すべく、彼女を連れ戻してくれる父親が必要とされているといったことのようにあります。この夢の解釈は、粗筋でいうと、こういった具合でしたわけですが、当初彼女としては全然納得した風ではありませんでした。しかしながら、その翌日、別の夢について語りました。彼女は眠りながらその夢を忘れてしまおうと努力したとのことでした。なぜなら、もう一つ彼女が続けたい極めて素敵な夢をそれが消し去ってしまうかに見えたからです。つまり忘れようとしたけれども、結局忘れることができなかったということのようにあります。その彼女が忘れることのできなかつた夢とは、以下のとおりです。彼女は、私の家族の中に居りました。もっとも私はそこに居たわけではありません。その上どうやら彼女はとても親しい知り合いになっていたのです。私の夫はそこに居りました。背が高く、そして見てくれのいい感じで(彼女の父親みたいに)とても抱きしめたいような可愛らしい赤ちゃんが一緒でした。彼は彼女に、妻が全然いい妻などではないということを語ります。だけどロザムンドは、子どもたちにとってもよくしてくれて、赤ちゃんもロザムンドと一緒にだと、とてもハッピーだということを告げます。それに対して、彼女は憤り深く、<あらまあ、そんな、全然ですわ>と返答します。<誰だって、この子どもなら愛さずにはいられませんもの・・>と。そして彼女は、妻である人というのは頑なな心の人に違いない、こんなにも愛らしく抱きしめたいような子どもを愛さないなどということがあるかしらって、自分の胸の内を吐きます。

ここで私がこの夢について何かしら一言でも話そうとする前に、彼女は急いで言葉を挟み、<食べることには何の意味もないですよ。それを再び全部吐き出すとしたら・・>と言いました。

この夢の中で、彼女はこれ迄になく、「赤ちゃん/分析患者」の抱く「母親/分析家」に対しての競争心というものに極めてあからさまに接触したことになります。それも、両親の関係を邪魔立てしてやりたいといった願望と同様に・・。この時点で肝腎なことは、彼女が夢をちゃんと覚えていて、たとえそれが気に入らなかつたとしても、セッションに持ち込むことができたということです。それ以降、彼女は徐々に食べ物をどうにか把捉でき、飲み下すことができるようになってゆきました。それは胃の中にといいながらもありますが、それと同時に、「彼女の受け入れ難い部分」についてもそうでありました。極めて徐々にではありますが、彼女は食べることを再び始めましたし、社交的な日々の暮らしにも戻ってゆきました。そして大學にも進んで、そこでの生活を楽しめるようになっていったのであります。

## ■症例その2; ジェラルド

ここでもう一人、かなり長期に亘って分析治療に携わった青年期の男子ジェラルドについて、その分析マテリアルの幾つかを提示しようと思います。分析治療を始めた当初彼は12歳であり、かなり執拗な強迫的ともいえる「潜伏期的防衛」にガッチリと嵌っていたと言っていいでしょう。彼の主訴とは、抑うつ感及び感情の平坦さ、そしてひどい気管支炎によく罹ることでありました。彼は、学校の教師たちからはそこそこ評価されておりまして、つまり‘いい子’というわけで、家族にしろ学校にしろ彼を充分誇りに思えるといった風なのでありますが、彼にしてみれば、そうした評価は全然何の励ましにも慰めにならないといった感じていたわけでありました。

分析の早期の段階では、彼は主に絵を描くことをとおしてコミュニケーションしておりました。それらの絵は極めて色彩に溢れ、そして美しいものであり、彼の生命力も情緒もすべてがそこに投入されていて、私との関係性には何らそうしたものは皆無であったわけですが。だが実際のところ、私が彼の表現するところについてその意図を理解しようとするときに、彼は協力的な態度を示すわけではなく、つまり質問されれば答えますし、さらには頭に浮かんだ連想があればそれを語るといったふうでありました。やがてこの成り行きからして、どうやら入念にそれら絵画作品に彼が打ち込んでゆけばゆくほど、分析的仕事が頓挫されがちで、その進行が妨げられていると考えざるを得ない事態になってまいります。つまり彼は、手掛けている絵画の或る部分を終わらせるまでは頭に思い浮かぶどんな考えも差し控えて語ることがしないといたったふうでしたから。そういうわけで彼の同意を得て、寝椅子がここで導入され、それで彼はもっと自発的に語ることを始めたわけでありました。夢もどんどん持ってくるようになり、それもたくさんの連想を伴うといった具合になってまいりました。

彼は、引き続きずうっと同じ几帳面ともいえる、協調路線を維持してゆきました。私の語ることには礼儀正しく耳を傾け、そしてそれに対して応答もするわけでありました。しかしセッションが終わった後に、私はしばしば、どうにも本来もっと面白いはずなんだけど(どうしたものか、なんだかつまらない)と内心ちょっと困惑した気分させられるということがあったのです。夢そして連想は、魅力的で、その内容からしても充分と言えるものでして、卓越した分析可能なマテリアルが豊富であったわけなのですが、どうにもセッションには何ら進展らしきものの手応えが望めないままなのでした。直に、彼の応答は注意深く‘編纂’されており、それで一見自発的といったふうに見えたとしても全然そうではないことが分かってまいりました。それらは、私が彼に語るよりもずっとはるかに重要視されていたのであります。彼の作品は、殊にその夢は、彼の絵画にも似て、私を満足させハッピーにさせるための彼の‘芸術作品’というわけでありました。私の試みる解釈は、その当時何ら彼の情動に働きかけることにはどうにもなり得ないといったふうでした。確かに彼はそれらを心に留めることがあり、そして後のセッションでマテリアルを理解する上でそれらを、そうしたことがどこからやってきたのか、まるで知らぬげに、用いることがあったわけですが。徐々にやがて彼にも自覚されてまいりましたことは、セッションから得られるはずの何かがどうも今一つ見失われているということでした。彼の生活全般についてもまた、そのように言えるわけですが。

彼の両親は、彼を援助できるなら何事も決して惜しむ人たちではありませんし、実際のところ彼が受容できる以上のものを悦んで与られてくれる人たちであるのは、彼も充分承知していたわけです。そして、そんな自分について彼は、詩人の「Edith Sitwell」の言葉を借りて、<ぼくって、いつもちょっと浮世離れしているんだよね(I was always a little outside life)>と言ったものでした。

分析の進行に従い、「潜伏期的防衛」が、それまで彼をそこに居てもそこに居ないといった妙にはぐれたふうで、つまり彼の情緒もその内的対象も、どこか彼から切り離されており、ピタッともしっくりとも来ないふうであったわけですが、それがここで幾らか弛んでまいりました。すなわち、‘暴力的で残忍な己れの部分’との接触が可能になっていったわけです。それは以前ですと、分裂し彼の弟に投影されていたわけなのですが。それでどちらかという弟とは距離を保っていた彼の態度が、正面衝突を余儀なくされるような事態へと発展してまいりました。それから彼は分析において、この暴力じみた思いが、彼の母親を専有するのを邪魔立てするといった意味合いで、実のところ父親の転移的側面へ向かっていることが理解され始めたわけであります。それらは、ますます週末そして休暇に関連して、経験されていることが顕著になってまいりました。またこの辺りで、彼の15歳の誕生日を迎える頃にですが、彼は女の子らに興味を覚えるといったことが始まります。それ迄ですと、距離を保ったまま、他の男友だちが性に纏わる分野においていろいろ企てる様子を受身的にそして窃視症的に遠くから眺めているばかりであったわけなのですが・・。

これからここで語ります夢は、彼が俄然いよいよ思春期に突入したことを示唆するものと言っていいかと思われます。彼は、それを或る金曜日のセッションに持ってきました。実はその前日、極めて珍しいことではありまして、待合室で彼は2、3分ほどセッション開始を待たされるということがありました。彼は待たされたということで気分が苛立ったといったことはまるで認めてませんでした。しかしセッションそのものは、意識にのぼらない焦れた気分やら欲求不満が充満しておりました。そして翌日の金曜日に彼はやって来て、心はうわの空で、その週末に予定しているパーティーに気が奪われておりました。何かしら良くないことが起こるのではといった悪い予感でいっぱいだったのです。それは、彼の自宅で開かれる最初のものであったわけです。彼は、もしも招待を受けてない輩が押しかけてきたら、どう対処したのか、そこで友人から聞いた話を思い出したわけです。パーティーに侵入してきた輩に部屋中が荒らされたといったこと、両親の家具が叩き潰されたり、陶磁器類は壊されたり、そしてカーペットにはシミを残したりといったことでもあります。そこで、彼自らの望ましくない破壊分子が、分析的週末(すなわち両親の性交)へ侵入するといったことについて私が解釈として彼に語りましたところ、それに反応して、彼はセッションを前日去る際に、気分が苛立って、非協調的で、目の前に立ち塞がるものがあれば蹴散らすにはいられないといった気分だったと語りました。そのセッション後に、彼は次のようなひどい悪夢を見たわけです。彼は或るパーティーに出ている、応接間でソファーに座って、可愛らしい感じの素敵なお嬢の女の子と話をしていたのです。敢えて言うならば、実にお行儀のいい会話を楽しんでいたわけですが、そこに老人がやってきて彼らの仲間に加わったわけです。すぐさま彼は、この女の子と性行為をしたいといった抑えようの無い衝動を覚え、それで避妊薬を探しに部屋から駆け出したのです。彼が

戻ってきますと、場面はすっかり変わっておりました。部屋の中には誰もいませんでした。家具も何も無い、がらんとした部屋で、壁はしっくい塗られ、壁紙は剥がれ落ちておりました。そこで彼は気取ったふうに、まるでナチみたいに、軍隊靴を履いて、その荒廃した空室を行進して歩いているのです。しかし何よりも問題なのは、彼がまるで何もどうでもいいといったふうに関心であったことです。この夢から醒めたとき、彼はすっかり心の底から狼狽させられたのです。

この夢についての理解を得るのにあれこれ探りを入れてゆく中で、彼は実に多くの連想をしました。私のコンサルティング・ルームとの関連であったり、前日のセッションのことだったり、そして彼が幼少の頃住んでいた家の両親の寝室に関連したことだったりです。夢の中の応接間というのは、最初どうやらコンサルティング・ルームのようでしたが、最終的には両親の寝室となり、それも荒廃したふうで、バラの花模様の壁紙が、それもぼろぼろに破れ、あちこち垂れ下がっているといった具合でした。この前日のセッションで、彼は私の部屋を去る際に、ラジエーター(暖房器)の近くの壁の塗ってあったペイントが剥げ落ちているのに気づいたわけで、彼にしてみると、それがまるっきりその日のセッションに味わった苦々しさを表わしているかのように思えたわけです(つまりケチが付いたといったこと)。可愛い女の子と一緒に彼を邪魔した男とは、私の家にやって来て彼が待合室の窓から外を見たとき、誰かが私の家に訪ねてきたのを目にしたことと関連づけられました。私の夫ではないかと、彼は想像したわけでしたが。私の質問に答えて、彼はこの夢を見た晩に夢精したことを認めました。それは部屋から猛スピードで出てゆくことにも表わされているわけですが。また、或るとき両親の寝室の引き出しをあちこち掻き回し、ハンカチーフを探していたところ、そこに避妊薬の入った箱を見つけたことがあり、そこから彼らがまだ性交をしているという事実を改めて思い知らされたわけです。つまり両親の性交は、決して過去の事ではないということ。青年期の子どもが往々にして抱く傲慢さからしてそのように仮定しがちであるわけですが…。事実はそうではないということを知ったわけなのです。

そこで、‘ガールフレンド・母親’と一緒に、彼の分析セッションで理想化されたところの‘お行儀のいい会話’をしていたところ、不躰にも邪魔された、それも「夫・父親」によってといった思い付き、それは彼が前日にセッションの時間を待たされたということに関連しているように見受けられます。これが、破壊的な性的感情の爆発的排除というものに結果したことになります。それは木曜日でのセッションでは認めることはできなかった(もしくは、可能性としてはそれを気づいていなかった)わけですが、夢精という形で現実化され、そして夢においてコミュニケーションされたわけで、しかも彼はその夢を記憶し、さらには金曜日のセッションにそれを持ち込んできたということになります。

こうした彼自身の‘暴力的な部分’は、基本的には意識下に抑え込まれているわけですが、いまだ未統合であり、彼の性愛によって目覚めさせられ、そして馴染みの無い、不可解なものとして恐れられたということになりましょう。それは、潜伏期にはごくたまに表出されるということがあるわけです。例えば、ラグビー場での試合中にだったり、もしくは時折弟との喧嘩で取っ組み合っていたりしてる最中に…。分析セッションにおいてはそれが認められるのは極めて僅かでありません。彼の物腰、その

ふるまいにおいては或る程度の傲慢さ(横柄さ)があり、ほんの少しばかりは辛辣で皮肉的な言葉を吐くことはあったわけですが、今や夢の中でそうした彼の‘暴力的な部分’はよりいっそう頻出してきたような印象でした。それもやがてしばらく後になってから、彼が或る女の子と初めてステディな関係を持ったときなど、それが強烈に独占欲の塊りとなって噴き出したわけです。彼女との付き合いに彼の時間が殆ど奪われて、その結果、勉学に深刻な支障をきたすといったことが起きておりました。

初めてガールフレンドとの交際が始まるや、それは受け身的でしつこい執着的なヒルのような性質をもったものであったと言えます。無論その源を幼少時に遡ることができるわけですが、つまり彼の母親に対しての極めて特別な排他的関係性が続いたということがあり、かつてはそれがナチの夢に突発したような暴力的な性的嫉妬心から彼自身を守ってくれていたわけであります。そこには‘寄生虫的な要素’があり、これは無期限に分析に留まりたいといった気に彼がなっていたことにも及ぶことかと思われれます。しかしながら、ちょっと見方を変えれば、彼は分析に打ち込んでおり、そこそこ進展があったのは間違いありませんし、それは彼の分析以外の生活においてもそのように言えるわけであります。

ここで、彼がほぼ18歳になった頃に見た或る夢について語ろうとおもいます。彼は分析を終了する心づもりで、大學への進学を考えていた頃でありました。とても期待しながらそれを待ち望んでいたわけですが、一方で変化を避けたい思いが強くて、今あるものにしがみついていたともいえましょう。ジェラルドはこの夢の中で、<ようやくにしてそこそこ幾つか特定の事柄の解釈はどうか届くようになってきたわね>と私が彼に語っていたということでした。その意味するところは、他の事柄は全然だけどね(つまり届いてない)といったわけであります。彼はそれから、この夢を私に今一度思い起こしながら語りながら、どちらかという解釈に意味を持たせることにおいて私に責任を負わせるのみで、彼自身としてはまるで責任がないかのような態度をしているといった印象を覚えたんだけど・・と語ります。彼に影響を及ぼしたところの解釈というのは、彼が自分の‘口’を‘肛門’として用いるといったことであります。それが、同じ夜に彼が見た別のもう一つの夢に光を当てたのでした。こっちの方が実は先であったわけですが。その夢とは、空想科学小説(SF)みたいでした。そこではこの世の終末といったような危機的場面が展開していました。家族全員は海辺に集合しております。目の前に巨大なゴム製の‘膀胱’みたいに見える何かが近付いてきて、どんどん大きくなり、膨れ上がり、そしてついには破裂してしまったのです。さらにはとんでもなくいやらしい物体がそこから流出してきて、あちこちへ拡散していったわけですが、誰もがそれから逃れようと懸命になります。彼は、このことは‘気の狂った糞便一オツパイ’に対しての彼自らの責任の何かしら否認ではなかろうかというふうに感じたわけであります。しかしながら、どうやら夢の中に彼の父親が現れて、誰もがうまく逃れられるように陣頭指揮をしてくれた模様であります。

この夢は、或ることを彼に想起させました。つまり幼い子どもだったころ、弟がまだ産まれる前のこと、父親と一緒にたまじやくしを捕まえに出掛けておりました。そして黒い輝くような貝殻のなかに何かがあるのを見つけました。それを壊すと、まるで軟体動物みたいに柔らかい何かでありました。彼はそれが何だったのか、ついぞ知ることはありませんでした。でもその後もしばしばそれが池の中で何をしていたん

だろとよく考えることがあったのでした。ただそこにへばりついて、何事かが起こるのを唯じっと待っていただけといったことなのかと…。これを話題にしている間、いろんな事柄に一体どういう意味があるのかを何とか彼に分からせようとしてくれる私にその責任を押し付けてばかりで、彼自らは何ら理解しようとする努力を大してしていないと思うと、何だか気まずい気分になるということを語ります。かくて彼は自分が押し黙ったまま、ただ待っているだけなのを認めたこととなります。そしてその沈黙こそが、実は‘糞便’といった何かに転換させられるわけであります。つまりのところ、彼自ら全面的にコミットすることもなく、もしくは全然依存的とも感じることもなしに、セッションから何らかの恩恵を得るべく、ただそこに潜り込んで身を忍ばせているだけといった企てがここに密かに隠されていたことになりましょう。

これは、「離乳へ向けての準備」の夢でありました。生まれただけの弟についての夢であり、その誕生は彼自身の誕生とも一緒くたになっていて、さらには彼の予期されている、しかし抵抗しているところの分析からの‘別離’とも関連して、総てがごちゃごちゃになっております。それは、母親の内側やら分析に潜り込んで、ただ何事かが起こるのをひたすら待つことにしがみついているといった、そうした彼自身の側面の描写であるともいえます。ここに、分析の終了、誕生、離乳、弟の誕生といったことが彼にとってどれほどの‘大惨事’であるのかが見て取れるわけです。そこで、それにどう対処すべきか、今や彼は父親の助けを求めているといったわけであります。

次の夢では、両親共が彼の助けとなるべく登場いたします。彼はセッションに来て、まずあれこれ愚痴り始めます。週末に、自分が何をしているのか、どんなふうに感じているかなど、あれこれ必死に考えねばならないなんて、実に面倒に思ったんだとか。なぜ唯やりたいことをやりたいようにやってはいけないのか、分析のことなど全部頭からすっかり拭い去って忘れてはなぜいけないのかと…。例えば、ここで彼は、女の子が「シェクスピア」を読んでいる夢を見たと言語始めます。彼女とセックスをしたいという願望で圧倒されたけど、でもそれはいけないことだと思い、それで彼女の肩越しに彼女が読んでいる戯曲をひょいと盗み見たんだとか。それは『真夏の夜の夢』でした。その文字は読めたものの、それらがどういう意味なのかが分からず、それで、彼女からそれをひったくろうとした。そしてもうこれ以上自分を抑え切れなれなと感じたとき、彼の両親が入って来た。それで彼はベッドから飛び起き、内心ひどく安堵したということでありました。

ここで彼は連想したわけであります。彼女の手にしてた本をひったくろうとした衝動は、金曜日のセッションの最後にふと私の部屋の電灯のスイッチをプラグから抜いて、私を暗闇の中に置き去りにしようとしたことと関連がありそうだということ。彼は、学校の成績を私に見せてどんなに自分が優秀かを示したいといった強烈な子どもじみた願望があるのを自覚しておりました。彼は、自分よりもいい成績の誰に対してもひどく羨望を覚えることを承知していたわけです。そして彼は、私の娘がなかなかの優秀な成績を修めていることが仲間内でちょっと評判になっているということを知っており、それで好奇心を刺激されていたわけです。彼は、人々はどうやらその家族背景に大きく左右されるということを知っており、それでその意味するところと言えば、彼女の場合はかなり恵まれたものであるということ、それ

は彼自身についても同様と言えるわけなのですが、それで彼は、彼女がその恵まれた境遇をどのよう  
にその将来に有効に活用し得るか、自分の場合と比較してみたい気にさせられたというわけなのであり  
ます。

夢及びその連想からうかがいますに、一年前に比べれば彼がそこそ矛盾のない、持続的な自覚  
へ向けて進んでいること、そして自らに対して責任を引き受ける程度がいつそう身に付いてきているの  
は確かと言えましょう。依然としてこれからも煩い続けてゆく必要があるということで、彼がどんなに腹を  
立てているとしても・・・彼に私の娘を連想させた女の子とは、‘母親’を表象しているともいえるかも知  
れません。限定された部分対象レベルといった意味では‘姉・妹’ともいえましょう。またそのレベルで言  
うならば、本は「父親ーペニス」ということになります。母親にあれこれ情報やらドラマ、そして詩などを  
与えてあげているといった意味合いで・・・そこで彼の好奇心、貪欲さ、そして願望を大いに喚起され  
たということになるわけであります。彼は、この場面に背後から忍び込んでやろうとしています。肛門的  
自慰を介して彼自身を性交に投影させたわけであります。しかしここで意義深いことには、このような  
やり方では、彼はことばの字面だけを得たばかりで、その意味を全然掴むことは出来なかったわけであ  
ります。すなわち、それは‘糞便’と同等化であり、赤ちゃんではないのです。つまりのところ、自慰的侵入は、  
両親の関係性がいかなる性質のものかを理解する手助けにはまるでならないということになりましょ  
う。彼は、それを知識としては理解できるとしても、‘詩’とか‘いのち’といった類いのこととして経験すること  
はできないわけです。彼の欲求不満そして羨望の最中では、そうした関係性が頭の中で生起し得る  
としても、その意味なるものは彼には否定されているわけであります。それで彼は、この「シェイクスピア  
ーペニス」を引き抜こうとしたというわけです。彼が電灯のプラグを抜いて、私を暗闇の中に置きざりにしよ  
うとしたように・・・両親二人共がここで登場し、それで彼がレイプを犯すことから救出したと言うわけ  
であります(彼の自慰行為の意味がまさにそれでしたわけで・・・)。

われわれがこの夢についてあれこれ思案し、解釈を試みていましたとき、<なぜ両親二人共なのか  
>と彼が苛立ったふうに尋ねました。それは恰も、殊更彼が子どもだからとか、もしくは特別に危険視  
されているから、だからどちらの親をも必要としているといったふうで、それがどうにも釈然としないとい  
った感じでありました。この頃にはもう既に、彼の成長における基本的な葛藤とは、両親をその内側におい  
て一緒にさせることを許容すること、そして彼らをそれぞれ人としてその全体性やら分離性を充分  
に認めかつ受容することであるのを彼は承知していたわけであります。すなわち、彼らはよりいっそうのこ  
と全体的対象(whole objects)として内在化されたことになり、それで彼らが共に連携し、いざとなれ  
ば彼の助けになるといったこと、例えば彼の倒錯的犯罪的衝動から彼を救出するといったことが、夢の  
中に彼らがその姿を現したことに明らかにされているものと考えられましょ。その時点で、彼は随分と  
安堵したわけです。実のところ、セッションに来る途中で、そしてセッションの中でも、彼は、彼ら両親に  
自分が依存していることに不平を抱き、自尊心を傷つけられたふうに思っていたわけであります。恰も  
それは週末後に、外界の「両親カップル(対としての親)parental couple」としての私に直面したことで、  
彼はより原始的な部分的対象との関係性に一時的に再び引き戻されたといったことでありましょ。

すなわち、ヒルのような赤ちゃんとして、吸い付いたままで抱えられていたいといった衝動へと駆り立てられて、分離及び責任といったことへ向けての心の苦闘を続けてゆくことを断念するといった、妄想分裂ポジションへの傾きであります。だが、今や彼は、こうした方向へと彼を牽引してくれる助っ人としての内的対象をどうにか確立した模様であります。

ここでもう一つ、ジェラルドの分析治療の最後の段階からそれらマテリアルを選んでお話ししたいと思います。そこでは彼は、原初的な対象 (his primary object) を巡っての原始的な暴力性そして専有欲といったことに依然として取り組むことを続けねばなりません。それも漸進的かつ徹底した「幼児性万能感」の‘非理想化 de-idealization’ が伴われていたわけですが。

セッションの始めに、彼は父親が購入することになっている新しい車に全然興味を持ってなくて何だか申し訳ない気がすると言います。彼が想像するところでは、父親はおそらくより小さめのレーシング・カーが本当は好みなんだろうけど、家族のニーズを優先的に考慮して、凡ての子どもたちとその友人たちをも乗せられるような形態の車に最終的には落ち着いたわけで、車のスピードについてはそこそこ慎重を期し妥協したんだろうと思ったわけです。彼の父親が家族想いであるということ、つまりその自己犠牲の精神を思うと、それに比して自分がまだまだひどく自己中心的であることを考え、気分が沈むといったことのようにあります。彼自身の或る部分では、彼の分析家としての私というのは、実に彼がそこにいるときだけしか機能していないと強く思い込んでいたわけでありました。われわれはこのことについて、さらに念入りに考察を深めてまいりました。これ迄にもお馴染みといえる彼の或る傾向についてであります。すなわち彼が、母親について、「父親・ペニス」もしくは「他の赤ちゃんたち」に対して何らスペースを持たないといった考えに固執しているといったことでもあります。すると、彼は、自分一人では何も出来ず、ただしがみついているだけで、総てを私に委ねてしまっていることを思うとどんどん気分が鬱的になってゆくと、苦しげに言い放ちます。それがセッションを無益なものにしてしまっているというわけです。私が話を続けている最中、彼は部屋の中をあちこち眺めておりましたが、そこにあった花が彼にとってひどくイライラさせられるといったふうでした。それが彼に、とても単純で、とても華やかな、子どもの絵を想起させました。それらは、彼に病院を想起させました。そこから、母親を病院に見舞いに行った時のことが連想として浮かんでまいりました。彼女が病気だったか、もしかしたらたぶん赤ちゃんの出産の後だったかも知れないわけですが。その折の彼の記憶にあるのは、その時点で見舞いに来た彼よりもむしろ父親の方に彼女の関心が向かっているということに気づいたときに覚えた彼の腹立ちであります。自分が重要人物だといった感覚からしても、また彼女に会いたいと熱望したことからしても、彼にはそれがとても痛烈な打撃として感じられたわけでありました。

われわれが、父親が(‘車’としての)母親を自分だけの専有物にすることが出来なかったことに憐れみを感じたことに話題を戻したとき、彼は口を挟んで、それは投影であるということを理解しており、だから私にそれをもう一度繰り返して語ってもらうには及ばないと言いました。そして、そんないかにも退屈極まりないことを話題にしたことを謝罪します。<もし僕がちょっとでも愚痴ることをしないと、それが

僕の中でとんでもなく膨れ上がってわけの分からない変なものになるものだから・・>と言いつつ訳をします。そして、彼は夢を見たことを語ります。それがどういう意味かを知っていると思った。だから先生に話すことでもない・・。でも、多分やはり話すべきだろう。たとえそれが何度と無くこれ迄も繰り返されたことであつたとしても、と彼は付け加えます。その夢とは、**独逸軍がクレタ島を爆破したこと**についてでありました。彼が思うに、クレタとは‘excreta(排泄物)’だから、これはもう一つ排便する類いの夢だと思ったわけです。ここで彼は、心からの感謝の念を吐露します。<ほんとうに先生に僕のこんな屑みたいな話を聞いてもらえて、どんなに感謝してるか知れない・・。誰も他にこんなことにいちいち本気になって聞いてなごくれやしない。それが自分にとってどんなに大事なことか理解してくれるはずがないだろうし・・。>

そこで、このセッションで取り組まれた事柄とは、彼の幼児性専有欲であり、そしてこれを父親・ペニスへ投影しようとするその企ての暴力性が今や自覚されたということでもあります。つまりのところ、何が何でも一番乗りしたいと、そうした‘女性のからだ’を排他的な高性能の車として使うといった、青年期的/小児性的のそれら性愛が彼に今や実感されたということになりましょう。ここしばらく、彼は自分の見る夢を、己れの内的状況を理解するように援助されるための鍵として大いに価値付けしていたように見受けられます。それはただ関心を他へと逸らすためにとか、ただ単に賞賛を得る芸術的作品としてではもはやありませんでした。単純な赤いチーリップが彼をとてもイライラさせたわけですが、彼の以前の子どもじみた絵の具の活用の意味合いが何であつたのか、これでよく理解されたように思われるのです。すなわち、それらは、お母さんの眼を輝かせ、その唇が彼女の幼い男の子のあつぱれな腕前を褒めそやすといった理想化された作品であつたわけであります。かくしてここに至って、かつて彼が胸に密かに抱いていたこうした‘幻想’が消え失せたということになりましょう。

さらには、今や彼の中に真正なところの分析家に対する自発的な感謝の念が湧いてまいりました。すなわち、そうした母親の受容的役割、すなわち「母親の夢想 (maternal reverie)」(Bion, 1962) に対してということになりましょう。すなわちその意図とは、投影を受けとめ、しかも‘屑 rubbish’ みたいなものによって窒息させられることもなく(彼は時折‘不明瞭な言葉にならない憤り’ゆえに窒息しそうに感じるがあつたわけですが)、それを言葉で明瞭にはっきりと表現できるように、整理整頓し得るだけの分別やら、それについてさらなる思考を手助けすることなのであります。すなわち、彼が‘排泄する’すべてのあれやこれや散漫な寄せ集めを、しっかりとその意味なり価値なりを把握することが可能となるまでしっかりと抱えてやるといったことでもあります。

## ■総括

症例・ロザムンドにおいては、彼女の深刻な初恋体験が苦い幻滅に帰したことで、離乳さらには弟の誕生を巡っての葛藤、その当時には巧みに避けられてあつたそれらに、再び彼女が引き戻されたということであつたようです。分析治療は、彼女の「偽成熟 (pseudo-maturity)」における投影同一化の中核的役割というものを露わにしたと言えましょう。すなわち、‘肛門’を通して‘オッパイ’へ向けての

投影でありますし(メルツァー、1965)、またその結果として混乱が‘オッパイ’と‘お尻’との間にもたらされたといったことです。このことは、相互的な理想化された関係性を維持する企てともいえるでしょう。さらには、「‘オッパイ’及びそれに伴う‘乳首’」への羨望を経験することを回避せんとする企てでもあったということになります。もう一つ別のレベルでは、これは‘父親・ペニス’と‘母親・ヴァギナ’との関係性、つまり「親なるカップル the parental couple」の創造的繋がりへの向けての羨望に対する防衛であったということになりましょう。

彼女は、母親/父親/赤ちゃんの三つ組みに対して、彼女自身をそれぞれに投影することで、或る種の「聖家族」を演出していたわけであります。後になって、彼女が寄宿学校へ行ったとき、彼女が陥った、母親を恋しく思う、赤ちゃんっぽいホームシックにどう対処したかということ、お喋り好きな父親もしくは弟と同一化することであり、そんなふうにして周りの女の子ら(すなわち家族)を大いに楽しませるといったことだったわけです。つまり、彼女は‘ライバル対象’そのものになったというわけです。彼女の魅力そして真正の優しさ、そして気質の善良さからしても、彼女自らの理想化が維持されて、そして万能感的に自らの対象を所有することによって分裂・排除したところの情動に直面化することを回避し続けるべく、周囲の人々からの反応を喚起したであろうことは疑いのないものと言えそうです。

こうして彼女は、自分自身が「偽者(a fake)」でしかないのではといったことに深く気づくに到ったわけであります。恋愛が失望に終わった折に味わった彼女の打撃がひどく苛烈であったのは、信頼が裏切られたということだけではなく、(彼女は生来人を信じやすいところがあり、そして事実その外界に対して信頼を寄せるだけの十分な理由があったわけですが)、馴染みのない貪欲さやら専有欲といった不快な感情が喚起されたことであって、それ迄はそうしたことについて深く取り組むなどまるでなかったことに起因するといえましょう。彼女の両親の愛情のお蔭で、その幼少時に彼女にとって万事うまくいっていたはずの「防衛」、それから学校においても、友人たちのお蔭で、彼女はその美しさと知性と、優しさによって勝ち得ていた「防衛」が、青年期に到ってまるで役に立たなくなったというわけであります。

こうして、短期で終了した分析治療であったにしろ、それは彼女にとって何らかの好機になったと言っていでしょう。それも彼女にとってショックでなくもなかったわけですが。自己理想化に基礎付けられた、彼女の‘偽の基盤’が吟味され、さらには原初的な関係性が幾らかでも立て直されてゆくことで、そこから彼女の善良なる資質がいつの日か‘本物’と言えるまでに、確実性がもたらされてゆくことを信じて、或る意味で彼女は大きい治療への意欲を示したと言えるわけであります。

症例・ジェラルドではまた、その思春期に強烈な性愛願望が発生したことによって‘前性器的葛藤’の突発的な再活性化が生起されたことが例証されております。ロザムンドと同様に、「防衛」はその潜伏期においては大いに功を奏していたと言えるのであります。もっとも彼の場合には、「長引いた潜伏期」であったわけですが、それも青年期に入って崩壊したということになります。彼は、ロザムンドと比較してみると、その生来の持ち味はかなり複雑で、羨望に彩られた気質だといえましょう。潜伏期

において、このことが、感情の平坦さへと導かれ、それがどうやらパーソナリティーから幾らか生命力を減じてしまったように見受けられます。彼の野心の背景には、豊富でかつ洞察力のある知性というものがあったのは確かであります。それを分析セッションの中で彼自らについて語る場合に援用することが出来たわけで、それでかなり微妙なことがらについて、機敏さを伴いながら、先取りしてあれこれ語ることがあり、それには彼自ら驚くこともあったりしたわけで。それで、自ら語っている、己れの内実する感情を実感するといったこともあったわけなのです。彼の分析をロザムンドと比較しますならば、その進展はかなり遅々としており、そしてドラマチックなところはかなり少ないといえましょう。なぜならば、それも彼の場合、むしろ彼自らの作品の理想化がより濃厚でありましたし、それにかなり強固な「否定主義 (negativism)」があり、援助されることへの抵抗があったことに関連づけられるかと思われまます。自らの厭な側面 (nastiness) に、そうやすやすとは動じることがありませんでしたし、後悔の念を覚えたりすることも滅多になかったわけです。しかし、概してかなり深く内省的であり、そして粘り強く考えるタイプであったといえるでしょう。

さて、ここで要約しますならば、これら二人の青年期の子どもの分析治療から窺われるのは、どちらものもそれぞれに、そのうわべだけのもっともらしさの側面がゆえに、持ち前の能力の豊かさを存分に謳歌することが妨げられているといった、つまりは「自己理想化 self-idealization」から派生した問題とも言えましょう。それも或る程度、そうした気質を持つ子どもを持ったことをごく自然に喜ぶ、両親との間で共謀されていたとも言えなくもないのであります。「相互的な理想化」は、幼児的な暴力性及び破壊性への防波堤としてしばしば使われることがあります。つまり、それらはコンテインされず、分裂・排除されるわけでありまます。しかし、依然としてそうしたものがこころの内に有るといった‘暗示(心の促し)’が消失して無くなりはしませので、それで若者たちは目の前に与えられている機会を存分に活用し、その恩恵に浴するのに自らが値するといったふうにはどうしても思えないといったことになりがちです。分析的な作業が進展する中で、彼らの手掛けたお手軽な作品(基本的には‘糞便’)の理想化から、‘オッパイ’そして幼少時の両親から得られた、生命が孕むところのよりいっそうの真実を認識すること(この場合、心の内側でそれら両親が‘一緒であること’そして‘別々でもある’といった自由が許されているといったことが前提とされましようが・・)、そうしたシフト(転換)が成し遂げられて初めて、彼らは性愛へのより大人の態度へ向かって、青年期の世界において希望を抱きつつ歩を進めてゆくことができるということが言えるかと思われまます。 [訳出; 2021/01/05]

\*\*\*\*\*

※原題; Infantile elements and adult strivings in adolescent sexuality

※出典; The Journal of Child Psychotherapy(1976), Vol. 4(2), pp. 29-44.

再録; 『Adolescence. Talks and Papers by Donald Meltzer and

Martha Harris. Edited by Meg Harris Williams.』 KARNAC. 2011. pp. 81-101

\*\*\*\*\*

## 『記者あとがき』 — 精神分析の‘本義’とは何か —

山上 千鶴子

「精神分析」は、そもそもどのような‘人(person)’を作ろうとしているのか。その本義が問われよう。そこに於いては、おそらく「救済」ということが核心的な課題でなくてはなるまい。ここでそれを語ってみようかと思う。

それは随分昔のことになるのだが、つまりタヴィストック留学からの帰国後、私は新宿の『朝日カルチャーセンター』で「旧約聖書のかんどころ」という講義を受講していた。講師は高木幹太牧師であった。その彼から、旧約聖書に於いては「背き」そして「立ち還り」といった、幾度となく反復するテーマがその骨子であることをうかがった。それが新鮮な感動として記憶に刻まれた。そこでは、誰からの‘背き’そして誰への‘立ち還り’かと言えば、勿論のこと「神(ヤーウエ)」なのであるが、この「背き」と「立ち還り」との間には「悔い改め」があろう。これこそが「救済原理」なのだ。そしてここで、そうしたテーマは「精神分析」についても言えるのではなかろうかとの直観が動いた。それが私の中で、精神分析に内在するところの「救済原理」を問うことの端緒となった。念頭にあったのは、メラニー・クラインの提唱する「結合両親像(Combined parent-figure)」なのであったが、それと並行して、「妄想分裂ポジション」そして「抑うつポジション」といったこと。まるで薄闇で手探りするような感覚であったが、日々の臨床の実践の中で、分析患者の個々それぞれの中で、それらがどう生きているのか、どう動いてゆくのか、その実態の究明が求められた。そして今に到っているわけなのだ。

さて、このマーサ・ハリスが著した青年期臨床についての論文には、一読してそうした「救済原理」が脈々とその底流に流れていることを感得した。何からの‘背き’、何への‘立ち還り’かと言えば、ここでは「内的対象(Internal object)」なのだ。そうした一連の分析治療の展開は、メラニー・クライン提唱するところの「妄想分裂ポジション」及び「抑うつポジション」への変容・移行といったことにも則っている。そうした概念が、これほどまでも分析セッションという場の中で徹底して‘生きたもの’として在ることに途轍もなく感銘を覚えた。すなわち、ロザムンドが、そしてジェラルドが、それを生きた！ということ。それがどれほどの心的苦闘 struggle であったことか、それはマーサ・ハリスの克明な記述の中に生き活きと偲ばれるわけで…。彼女のクライン派精神分析家としての真骨頂が遺憾なく発揮されている。ここまで徹底しているということに改めて凄い！と私は感じ入った。真に彼女に於ける、その揺るぎなさは、精神分析への「信(faith)」の勝利ともいえようか。ここに、精神分析というものの‘本領’もしくは‘本義’が垣間見られたのである。

振り返って想うのだが、私は彼の地で、どうにも彼らには「自明の理」であることが自分にはさっぱりわかっていないということに痛く苛立っていた時期がある。帰国してからも、長らくそうした疎外感を私は引きずっていたように思う。或る意味、それは彼らに対するの敵愾心と言えなくもない。それから40年

余も経て、ここで引退を間近にした今ようやくにしてなのだが、この1976年のマーサ・ハリスの論文に出会い、〈やはりそうなのだ、それでいいんだ・・・〉と、私もまた‘彼らに列なる一人’としてのクライン派の自覚を得、心が落ち着いた！

因みに、ドナルド・メルツァーはその最晩年に、〈あなたの内なる力を一体どこから得ているんですかね・・・〉と尋ねられて、〈内的対象への信だ(faith in my internal objects)・・・〉と明快に答えている。その生涯を通して、過ぎ越し日々どんな‘背き’が、そしてどんな‘悔い改め’があったのかはもはや問うまい。‘一人の巡礼者(pilgrim)’に過ぎないといったふうに、彼は自らを語ってもいた。真に「内的対象への信」、そうであればこそ「心の安らぎ」に辿り着いたであろう彼を義としたい。

これ迄もずっとそうだが、私は、こうしたクライン流の〈救済思想〉が精神分析理解として日本人にどのように根付いてゆくのか些か不安を感じる。そこで、ちょっと唐突にも聞えるだろうが、ここに「新井奥邃(あらい・おうすい)」という幕末・明治・大正を生きたキリスト教思想家について語っておきたい。実のところ私は、《日本精神分析の土着化》を展望せんとするも、そもそも日本に於いて「クライン派精神分析」の‘支持基盤’など一体どこにあるのか、一体誰となら繋がるものかさっぱり見当がつかなかった。そこで絶えず遮二無二何かを探し求めていたように思われる。「新井奥邃(1846-1922)」にいつどこで出会ったのか、もはや記憶が定かでない。彼は、「二而一・一而二なるところの父母神(チチハハカミ)」といったふうに、「神」を父・母の‘対’なるものとして捉えている。ここに、クラインの「結合両親像」との関連性を察知し、俄然興味を抱き、彼についての参考図書も幾つか買い求め、読んだ。一時は彼のお墓に参らねばと思うほどに入れ揚げたのに(!)、その文語調がなんとも難解で、どうにも読めない。やがて挫折した。手許にあった『奥邃廣録』などは総て図書館に寄贈した。それで忘れてしまっていた。ところが今頃になって、想定外なことが起きたのだ。それで、彼に再挑戦したというわけ。今回、新たに幾つかどうにか入手した参考図書の中に或る文章を目にした。驚愕した！『新井奥邃著作集 第一巻(第6回配本)』(春風社2002年)の中の、『十二言及他二十三篇』1904年(明治37)の「悦楽新聞」の最初の部分(P.226)である。それをここに一部抜粋して載せる。

- 一、嗚呼、福なる哉母や、善なる哉父や。
- 二、厥の善以って我が不善を正し、厥の福以って我が禍を滅す。
- 三、我が罪過を滅して其の福を賜ふ、万福なるかな我が父と母。
- 四、父母や降りて茲に在り、求めて我を贖はる、贖ふて己れに帰せしめ、  
而して更新に御意を命ぜらる。
- 五、万福の父母は我が万禍を焼滅し、生命の律法に於て、我を吾が死罪なる生活より救はる。
- 六、本然の善性を除けば、我は醜悪汚穢の物たり、長く真父真母の家より逃亡せし頑愚な児孫たり、今や時到来り、福の時也、父母来りて我を求む、  
我を喚び我を扶け我を引て其家に帰る。……

驚嘆した！ここには救済テーマの全てがある。「背き」も「立ち還り」も…。さらには「悔い改め」も、そして「贖い」も…。奥邃の「父母神(チチハハカミ)」とは、まさしく「赦しの神」であり、「贖いの神」であった！この奥邃という人の文章は言うなれば懺悔書みたいなもので、つまりは世のいわゆる著述ではない。祈禱し、独り沈思黙考して獲得した独自の信条を開陳したものであると言われてる。確かに、ここに掲げた文章にも彼という人の至誠の「祈り」が聴かれる。それに重ねて、特には症例ジェラルドに於ける、「両親共」が彼の助けとなるべく登場するといった夢(及びそれら一連の夢理解)も想起されよう。「弱さ」から「悪」への認識を内容とする洞察がそこに幾ばかりかうかがわれるという意味で…。因みに、奥邃は「改転」(メタノミア)という言葉を使っている。「魂の方向転換(悔い改め)」のこと。そして、この救いに至る絶対の条件の契機となる「認識」を求めている。かくして、「メラニー・クライン」と「新井奥邃」とが私の裡で時空を超えて響き合う。なんだかひどく痛快だ！

更にここで、またまた些か唐突にも聞えようが、フロイトの「エディプス・コンプレックス」について語っておこう。メラニー・クラインは実直に臨床マテリアルからの発見に基づいて「結合両親像」(Combined parental figure, Combined object, Combined parents)の概念を形成した。その内実がどのように変容するのか、つまりはマーサ・ハリスも語っているように「価値」の変換だが、それを妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行といったふうに把握した。それがフロイトの「エディプス・コンプレックス」を継承発展したものなどと彼女自ら考えていないふうであり、事実それを指摘した人も皆無であろう。だが、かねがね私が考えるのに、「エディプス」の物語の筋を脚色し、母親を専有せんとする息子の「父親殺し」というテーマを考案したのは、確かにフロイトの炯眼と言えなくもないが、そこに「父親からの赦し」が背景に斥けられているのは片手落ちだ。旧約聖書、殊には「イザヤ書」だが、(父なる)神から贖われること、それが「救済」の眼目としてあるわけで…。エディプスならずとも、父親から赦しを得ずして生きること、それはあまりにも惨い。しかもエディプスの場合、その神話では父・ラーイオス自らの「罪過」ゆえに呪いが掛けられ、息子に殺されるという神託に到ったのだから、尚更にこの悲劇は釈然としない。確かにフロイトの「エディプス・コンプレックス」がわれらの深層心理の一面を衝いているとしても、「エディプスの末裔」たるわれわれが、いかにその「認識愛」を擁護し、真理の究明に精魂を傾けるとしても、それが謎解きやら罪の糾弾に留まっていはいはずはなからう。もう片方の「父親の赦し」を希求する心」に断じて盲目であってはなるまい。事実フロイトが父親の死に遭遇し、痛く動揺したこと。そして彼が40歳の誕生日に父親から贈られたヘブライ語の聖書を終生大事にしていたことなども思い浮かべられる。症例ジェラルドも、改めてこの観点から考察すると、なかなか感動ものと言えなくもない。であるから、メラニー・クラインの「結合両親像」の概念こそ、「赦し」そして「贖い」といった救済への道」を拓いたと言えるわけで、これこそがいつしか未来の精神分析の要諦になるであろうことを、私は信じて疑わない。

さて、新井奥邃は、その『独語録』(1893年)の中で、このように語っている。<…神の悦びは、神の忘却にあり。…忘却は神の本質なり。忘却に導くものは、沈黙の愛なり。これ何人にも告げざるも、心を開き、その目的を神に告ぐことなり。神は之れを知る。神は記憶せず。

神は万物が、消えざる聖光に照らさるを知る。光は愛に抱かれ、胸中に入り、魂に入る。愛の感ずるは、悦びのみ。されば、つねに全人の贖罪の義務を負う神は、その愛に於いて忘却す>と・・。ここで何故に「忘却」なのかといえば、それが「赦し」の眼目でもあるからだ。実はドナルド・メルツァーのことなのだが、彼は、1990年に『The Centre for Psychoanalytic Psychotherapy in London』に招聘され、講演している。その折のトランスクリプトを『Melanie Klein Trust』のWEBサイトからダウンロードして入手した。これが滅法面白かった。ここに「forgetfulness (忘却)」そして「forgiveness(赦し)」の言葉を目にした時に、私はまさかとわが目を疑った。無論のこと聴衆の反応は微妙で、彼らの戸惑いは隠せない。概して冷ややかであったことがうかがわれる。さもありません！「エディプスの末裔」とはそうしたものだだろう。ここに、メルツァーが彼らとは自ずと一線を画すところの精神分析家であることが証されておろう。それも飽くまでも彼が自ら語っているように、<内的対象への信(faith)>の導くところのものであったことは間違いなからう、と私は考える。ここで彼は、‘forgetting(忘却)’が、成長へと導かれる機縁の一つとして、つまり注意が過去から逸れてゆくことの積極的な意味、すなわち‘心の向き’が変わるというわけだが、さらには、このforgetting (忘却)が、forgiveness(赦し)の重要な側面になると語っていた。これは凄い！要するに、「精神分析」はもはや過去にしがみつき、その追憶に終始するばかりではなく、未来を開拓することを共に目指す‘場’となるのが夢想されているということにならうか。

さて、ここで改めて「新井奥邃(1846-1922)」とは何者なのかを語らねばなるまい。とにかく不思議な人なのだ。1846年(弘化3年)仙台藩に生まれ、幼少時より儒教に於ける修養の道の研鑽に励む。函館でギリシア正教会の司祭ニコライと会い、キリスト教の真理と人類救済の福音を会得する。後に日本最初の文部大臣となった森有礼(1847-1889)の知遇を得、その人柄を見込まれて、「キリスト教の本義を究める」ことを森から托される。1870年(明治3)、森が初代少弁務使としてアメリカに赴任する折、彼に随行し渡米する。弱冠25歳であった。そこで宗教運動家のトマス・レイク・ハリス(1822-1906)に引き合わされ、そのコミュニティ「新生同胞教団」に入団。勤労と祈禱の生活といった、原始キリスト教と称する特異のキリスト教の実践と信仰を学ぶこと29年。1899年(明治32)帰国。54歳になっていた。‘いわば着の身着の儘で’帰国したわけだが、彼はその時アメリカで執筆した「Inward Prayer and Fragments」を持参したという。〔これは、後に翻訳され、『内観祈禱録』として刊行された。〕1903年(明治36)、東京市外巢鴨村に篤志家の援助により「謙和舎」が落成し、移り住む。ここで少数の学生を收容し、信養立志の道を誨えたとのこと、また「大和会(たいかかい)」を設けて、同学同好の士の求めに応じ、日曜日毎に儒教やキリスト教について講釈した。奥邃はこの舎と会両友の共読の便として、その都度無署名の冊子(パンフレット)を配布する慣例であった。奥邃が帰国して没するまでの約20年間に発表された、それら無署名の文章は、死後7年を経て、散逸を憂いた門人らの尽力で『奥邃廣録』五巻に収められている。その生涯とは、彼のいうところの「有神無我」に尽きる。「巢鴨の隠者」とも呼ばれていたらしい。社会の表面に出ることを嫌い、「名利を求めず」は実に徹底していた。<何物も後に残すな、墓も建てるな>というのが遺言。彼の肖像写真など、一葉も残されていない。

ここで殊に注目されるのは、奥邃と美術界の関わりである。東洋堂の月刊美術誌で『絵画叢誌』というのがあり、美術界に広い目配りを持つこの大判の雑誌は「新刊紹介」の名で特筆される『奥邃語録』刊行の記事を時に長く、時に要旨を掲載している。かくて奥邃の名は徐々に美術家たちに親しいものとなった。『語録』にもまた響き合うように、奥邃の美についての思索が表白される。彫刻家・萩原禄山は19歳の頃より奥邃に私淑敬愛していて、アメリカ留学の際は饑のことばを貰っている。『読者読』の中の「贈言」がそれ。。守衛の帰国後、奥邃の美に関する言説は再び多く、ことに明治41年10月の<少年は生命に富む。夫れ生命は美なり。美は生命なり>に始まる『語録』は特筆に値する。ここに、確実に奥邃がある系譜、おそらく萩原守衛に発する美術家たちの芸術観を養ったということが言えるのである。因みに、ニューヨーク以来の守衛の友、洋画家・柳敬介は守衛の手引きによって奥邃の膝下に参じ、その門弟となった。そして、詩人・高村光太郎に奥邃を伝えている。その生命観が「作の力というのは生の力の事だ」とする光太郎ら、いわゆる「生命主義(もしくは内的写実主義)」と目される人々の主張を通して、更に新しい世代へと奥邃の道を整えてゆく。

こうした事実を私が知ったのはごく最近であり、「寝耳に水」というか、ほんとにびっくりした。柳敬介から奥邃の『読者読』を贈られた光太郎はその書を愛読し、<自分の勇気をやしなはれてみます>と友人への手紙に書いているんだとか。知らなかった！だが、ひどく腑に落ちた。奥邃という人は、実に「伏流水」のような人で、どこかで知らぬ間にその進む生きた言葉で誰かを養っている。どうにも鼓舞されずにはいられない。或る見方をすれば、彼らは奥邃の「果実」とは言えまいか。萩原禄山の彫刻作品も、高村光太郎の詩も。。そして、ここに特筆すべきもう一人、木彫家の「橋本平八」がいる！

実は、近頃ひよんなご縁で、美術史家「丸山尚一」に導かれ、私は「地方の仏たち」に遭遇した。30年余、彼は好んで僻地を歩いて廻った。<日本の独自の表情がそこにあると思ったから。。>と彼は語っている。<日本の風土的特徴を捉えるのには、仏像がそれも地方にちらばる平安の木彫仏がもっとも顕著だと思う。これほど端的に日本文化の土着的性格を語っているものはないのではないかと。。私は己れのルーツ探しに興奮し、彼の著作を読み漁り、それから買い集めた。『生きている仏像たち—日本彫刻風土論』(読売選書 1970)から始まって、『十一面観音紀行』(平凡社 1985)、『旅の仏たち』(1~4)(毎日新聞社刊 1987)など。その極みに、大型本『秘仏 十一面観音』(平凡社 1985 丸山尚一・編 藤森武・写真)を購入した。引退後の慰めに！それら‘仏たち’が傍らに居てくれたら、私も寂しくはあるまいというわけ。それを入手したときは、もう嬉しくて心が躍った。美術鑑賞の意味はなかったのだが、それら仏たちは誠に美麗にして靈妙であった！そして、それら仏一つひとつが私にとって、まさにメラニー・クライン言うところの「結合両親像」そのものとして映った。また新井奥邃の説くところの「父母神(チチハハカミ)」とも。。そのふっくらとした面立ちには慈愛と叡智が刻まれており、何とも心慰められるものであった。それでふと、<なあーんだ、「仏さま」って、メルツァー言うところの「reparative-penis(修復するペニス)」じゃないの！>と内心感嘆し、独り微笑した。何だかとても有り難いわけ。自然に手を合わせて拝んでしまう。気持ちがあっさりする！ようやく自分のルーツに繋がった安堵でもあったろうか。ついでに、『新・円空風土記』(里文出版 1994)も入手したわけだが。

大変な‘鉦脈’を掘り当てたようで興奮した。そこから、改めて仏教彫刻と近代彫刻との関わりに俄然興味を覚えたわけで。そこで、木彫家・「橋本平八」に出会ったというわけ。

木彫家・橋本平八(1897－1935)は‘伊勢の人’である。彼には、「木彫」という旧来の技法を近代的な表現手段として自立させるという強い意志があった。ロダンの生命主義の系譜を受け継ぐ日本美術館の会員であったが、脱俗を敢然と決意し、都会の喧騒から逃れて伊勢に帰った。その郷里三重県朝熊山麓で脳溢血のため没す。1935年(昭和10年)11月、享年39歳。死後7年後、橋本平八の遺著『純粹彫刻論』が、実弟の詩人・北園克衛の手で刊行された。その中にごく僅かながら、新井奥邃に言及された箇所がある。昭和6年10月の日記だが、<喜多(武四郎)氏より新井奥邃広録一部贈るとの葉書に接す。……研究所時代より共に先生を偲び、夏その一部の著書を書写するなど奥邃先生に対する敬意をおしまぬ余である故に、喜多氏の好意実に有難き極みである……>といったものがその一つ。またその『純粹彫刻論』には、奥邃語録の一行、<清心神を見る如く無慾美と遊ぶ可し>を引いている箇所もある。平八の彫刻家としての全生涯を覆って、奥邃は大きな影響を与えたものと見受けられる。すなわち、彼もまた奥邃の‘果実’の一つなのであった。それら作品群、一つひとつに精神的気韻が漲っている！

橋本平八の木彫作品はどれもいい！取り分けて、「花園に遊ぶ天女」(1930)、「幼児表情」(1931)、「笛吹く少女」(1933)などは私の大のお気に入りだが、ここでは平八晩年の作品「或日の少女」(1934)を取り上げたい。死の前年1934年の日記(1月11日)に「童女像着想」とある。そして、制作は3月9日から4月21日迄で、題名は当初「祈」であったものが、最終的には「或日の少女」と決定され、京都大禮記念展覧會に出品された。おかつ頭の少女が、顔の正面で手を合わせ、座して一心にお祈りをしている、高さわずか61センチほどの木彫の作品である。しかも、この像には彩色がほどこされている。少女のほほ紅だけでなく、綿入れの袖口の緑色や袖口からのぞいているセーターの朱色なども目につく。展示会場で通りすがりに目にすれば、ちょっと可愛いらしい感じの作品という程度の軽い印象に過ぎなからう。だが、この像は何かしら言い知れぬ靈力を放っている。己れの内なる古層に埋もれた記憶が蘇るようで、思わずその合掌する姿に誘われ、いつしか同体化してゆくのだ。そして、ふと私は思う。古今東西このような彫刻作品などあった例があるかしらと…。



この女の子のモデルは平八の長女・蘭子ちゃんである。4歳である。この子が合掌して一心に祈っている、その先に何があるんだろかと、ふと私は想像してみた。ああ、そうか！「廻り地蔵」だわ、と一瞬間閃いた。平八の郷里「伊勢・朝熊(あさま)」には江戸時代から「廻り地蔵」が伝わる。小さな厨子に納まる地蔵を順繰りに家から家へ廻して、供養しているんだとか。因みに、平八の父・安吉はこの2年前(昭和7年10月)死去している。平八は親の生前大いに孝養を尽くし、日誌からもうかがわれるように、病床にあった父親の看取りも随分と情の通い合った、濃密にしてしみじみとしたものであった。

おそらくはわが娘の手を合わせて拝む、その姿に自らを重ねたであろうことは疑いを入れない。彼の日記に、不思議な陳述が見られた。これが私の胸にジンと響いた。それは、亡父一周忌法要を迎えた昭和8年9月25日のこと。こう書かれてある。<自分は父の甦りである。断惑して潔斎してここに永遠の安穩なる自分の最も意義深き人としての最後の勤めに取り掛かるものである>と。そう言えば、奥邃の『十二言』の一つに、《嗚呼、父母在(いま)す。永遠に偕にす。吾も亦独りならざるなり。……》とある。平八は、これを豁然と悟ったということだろうか。

<いのちの列なり>への帰依ともいえよう。かくて己れの本然を得、ここから「或日の少女」制作へと繋がったものと思う。こうした自己覚醒こそが、『救済思想』の根幹でなくてはなるまい。そしていつか「精神分析」もまた…。生涯私は、この童女像の‘祈りの姿’を心の内に抱き続けてゆくだらう。帰国後40年余、ここ東京・原宿で心理臨床に携わってきて、今真にこの「着地点」に辿り着いたことを大いに愛でたと思う。

[2021/01/05 記]



\*\*\*\*\*

### ※参考図書一覧※

#### ■新井奥邃(あらい・おうすい)(1846-1922);

- ・新井奥邃著作集 第一巻(「読者読」、「十二言及他二三篇」他) 春風社 2002
- ・[新井奥邃の人と思想 1] 工藤直太郎著「新井奥邃の思想」青山館1984
- ・[新井奥邃の人と思想 2] 「内観祈禱録」新井奥邃著 工藤直太郎訳  
「奥邃先生の面影」福田與編 青山館1984
- ・「奥邃論集成」春風社編集部編 春風社 2014

#### ■丸山尚一(まるやま・なおかず)(1924-2002);

- ・「生きている仏像たち—日本彫刻風土論」読売新聞社 1970
- ・「十一面観音紀行」写真・藤森武 平凡社 1985
- ・大型本「秘仏 十一面観音」写真・藤森武 平凡社 1985
- ・「旅の仏たち」(1~4) 毎日新聞社刊 1987
- ・「十一面観音の旅」新潮社 1992 ・「続・十一面観音の旅」新潮社 1994
- ・「新・円空風土記」里文出版 1994

#### ■橋本平八(はしもと・へいはち)(1897-1935);

- ・「純粹彫刻論」(復刻版/初版1942年・昭森社版) [跋;北園克衛] 伊勢文化舎 2012
- ・雑誌「近代の美術」第16号 [円空と橋本平八 本間正義編] 至文堂 1973
- ・「伊勢人」臨時号 [橋本平八と北園克衛;兄弟の原風景をゆく] 伊勢文化舎 2010

\*\*\*\*\*